
仮面ライダーディケイド～紅蓮の破壊者～【オールライダー・バトルカーニバル】

ジュンチェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜紅蓮の破壊者〜【オールライダー・バトルカーニバル】

【Nコード】

N2328BA

【作者名】

ジュンチエ

【あらすじ】

2012年突入記念！『仮面ライダーディケイド〜紅蓮の破壊者〜』オールライダー企画！！
他にも作者様の作品からゲストを呼びかなりカオス！？（そのため原作に書いてない作品がありますのでご了承下さい）まあ、細かい事は気にするな。

あらすじ、仮面ライダーディケイド・ブラットこと西門 四季はある世界で羽を休めていた…。そこに届く『バトルカーニバル・ト

「ナメント」への招待状…。その招待状は様々な世界のライダーたちにも届く…。果たして彼は勝ち抜けるのか…。それとも…。
紅蓮の破壊者、仮面ライダーディケイド・ブラット…。闘い抜く先にその瞳何を見る？

第一話・日常とイレギュラーとリーゼント（前書き）

調子にのって初めましたオールライダーです。

『仮面ライダーディケイド』紅蓮の破壊者』の本編の平行にあたる作品です…。

他、様々作者様の作品とのクロスが予定されています…。何とぞご了解下さいませ…。

それでは！！

第一話・日常とイレギュラーとリーゼント

仮面ライダーディケイド・ブラット…

別名、紅蓮の破壊者…

様々なライダー、戦士のいる世界を旅し時に迷い時に力を合わせ困難を乗り越えてきた…。

そして、新たなる世界にたどり着きその瞳は何を見る…。

カフェ『スプリング』…

ここは1人の青年が切り盛りしている店である…。その青年の名は『西門 四季』。またの名を『仮面ライダーディケイド・ブラット』

。彼は本来なら様々な並行世界をスプリングと共に行き来するライダーであったが、なんだかんだで今いる世界の居心地が良くなりここに居着いてしまったのである…。

ちなみに彼のいる世界は都市部の外れの港町である…。そして、様々なライダーやかつての戦士、英雄たちが羽を休めている世界なのであった…。

「ふう…」

そして、時は午前8時…

四季は店の前で伸びている…。

「さあ…て…今日も良い1日なれば良いが…」

彼は朝日を存分に浴びあくびをする…

そこへ…

「やつほ〜！四季くん！！」

栗毛のワインテールの女性がやってくる…。中々の美人だ。

「お！高町さんじゃねえか。おはよーさん。」

彼女の名前は『高町 なのは』。スプリングによく通う常連客で幼い頃から『魔法少女』なるモノをやっていたらしい。『魔砲少女』という話もあるが…

「なのはで良いよって言うてるのに…」

「迂闊にアンタを呼び捨てにしたらこの店と俺の生命が危ない…。」

ちなみに彼女、結構モテる。ファンも相当おり、中には少々過激なお方もいられるので四季は自重している。

「今日はお店開けないの？」

「ああ、今日はSMSのほうに顔を出す。一応、ピンチヒッターコックとしてな。」

「ふ〜ん…」

なのはの質問に素っ気なく答える四季…。なのははどこか心配そうな顔をしている…。

「心配するな。アルトやオズマたちでそこらの悪党怪人ぐらい何とかなるだろ。俺が変身するのは万が一の時だ…。」

四季はなのはの頭を撫で店の前に置いていたブラックディケイダーへ股がる。

「じゃあな。ヴィヴィオによろしく。」

そう言うとアクセルを吹かしその場を後にした…。

約1時間後…

SMS本社前…

場所は変わり機械的な模様の三本のビルの前…

このビルはSMSという軍事プロバイダー（用は民間軍事会社だ）の本社である…。といっても主に要人の警護、依頼された物の護送、怪人退治がもっぱらの仕事であり基本契約は政府と結んでいるため一般人が依頼などそうそうできるはずはない。

まあ何故四季はそこに来たか？無論、ライダーとしても『一応』勤

務しているからである。

しかし彼の今回の仕事は…

S M S 本社食堂『フロンティア』

「さあ！バリバリ働きますか！！」

彼の仕事はコックである。

小綺麗で清潔感があり何よりのメニューも涙が滲む程のうまさであると言われているS M Sの食堂。（少々過剰表現だが）そのため人手不足を補うため四季はここで働いているのである。

元々はスプリングに来たとある男に料理を出したところ『素晴らしいイイ！！ハッピーバースデー！！是非とも私のお気に入り』の食堂で働きたまえ！！』と言われ何故かちよくちよく手伝いをする羽目になってしまったのだ…。正直、スプリングの方も気にかかるのだが『潰れたらウチでチーフをやれば良い』と言われる始末。そして、今のチーフは『ウソダンドコドン！？』と叫んでいたとか…

(それはそれで悪くないけどな…)

四季はそう思いながらダジャムライスという特製の赤いソースのかかったオムライスをカウンターで待つ客へ運ぶ…。

「お待たせしましたタジャムライスです。」

「おう！サンキュー！！」

それを受け取ったのは改造した学ランを着こなしたリーゼントの少年…。
だが少年はそのままそこを去らず…

「アンタが仮面ライダーディケイド・ブラットか？」

そう四季に訊いてきた…。

「？、お前は誰だ…？今、忙しいんだが…」

四季は彼とは面識が無いので訪ねてみると…

「俺の名前は如月 弦太郎！！全ての仮面ライダーと友達になる男

だ！！それとこの会社の人達とも友達になるぞ！！」

「「「」…(OMO)?「「「」

少年が叫んだこの瞬間…

誰もがフリーズした…。

「ん？聞こえなかったか？んならもう一度、俺の名前…」

その頃…

「ヤバイよ！遅刻しちゃう！！」

食堂へと続く廊下を走る小柄な緑色の短髪の少女…彼女の名前は『ランカ・リー』。食堂でバイトしているアイドルの卵である…。今、彼女は寝坊のため勤務時間に遅刻しかけているのだ…。

そこへ…

バタン！！

「きゃ！？」

急ぐ彼女は誰かとぶつかってしまっ…。

「いった〜…」

「あの…大丈夫？」

ぶつかった相手はツインテールを巻いたランカとそう年齢の変わらなさそうな少女…。因みにスタイルが良い…。

「あ！スイマセン！！」

「私は大丈夫だから良いけどそれより貴方、食堂への行き方知らない？」

ぶつかった少女は食堂への道をランカへ訪ねた…。

「あ！それなら私今行くところなんですよ！すぐそこですし一緒に行きましょう！！」

「ええ…ありがとうございます。」

こうしてランカは少女を食堂へと共に行くことになった…。

そして食堂前…

「ここですよ！」

「あ、ありがとうございます。貴方…名前は…」

「ランカです。ランカ・リーです！」

「私は巴 マミ…機会があったらまた逢いましょう…。」

2人が自己紹介を終え食堂のドアを開けた途端…

ガチャ…

「俺の名前は如…」

バタン！！

マミは急いでドアを閉めた…。

「HA！HA！HA！HA！私も貴方も疲れてイルヨウネ〜。何だかりーゼントの幻覚ミチャツタワ〜。」

「？…マミさんどうかしたんですか？」

明らかに取り乱したリアクションをとるマミ…。

(…：そうこれは幻覚よ。そう、きっと…！…！)

ガチャ…

「おう…マミじゃねえか…！今日、俺はこの食堂の全責と…」

ボタンー！

マミが再びドアを開けた先には彼女の願い虚しくリーゼント少年の姿が…

「あの…マミさん…お知り合いですか？」

「ハハ、ゴジョウダンヲ…」

完全に棒読みのマミ…。

「あーいけないー！早くしないとー！」

「え？ちよ…！？」

しかし、そんなことをしている暇の無いことに気づいたランカはドアを開けてしまう…。

「お！アンタもこの食堂の人か？俺の名前は如月…」

あちゃ〜…マミはそう思った。ランカはもれなくリーゼント少年に掴まり自己紹介を食らってしまった…。

「私の名前はランカ・リーです。よろしくね。」

まあ、ランカは別にフリーズする事なく自己紹介で返した。

(まずいな…ランカちゃんの良いとしてこの食堂の雰囲気…)

一応、通常運営と思われるランカとリーゼント少年…。しかし、それ以外の人達の気まずい雰囲気はマミは感じられた…。

ここは一旦退くべき…

マミがそう考えた途端…

「おい…」

「は、はい!？」

黒い長髪の青年が話かけてきた…。四季である。

「アイツ…お前の連れか？」

「ハハ…まあそんなところですが…」

焦りながらも対応するマミ…。

「お前…連れから目を放すなよ…だいたい…」

このあと彼女は四季からの説教をくらう羽目になった…。

しかし、彼女の不幸はここでは終わらない。

「んじゃ、よろしくなランカ。」

「よろしくね弦太郎君」
そうそれはランカがリーゼント少年と握手をしたその時だった…。

「ランカに手を出すなアア!!」

バキッ!!

「ぐへ!？」

何者かがリーゼント少年を殴り飛ばした。

「な!?! てめえ何しやが…!」

威勢よく起き上がったリーゼント少年の目に飛びこんできたのはピ
アスをした無精髭を生やしたグレーの髪を後ろで纏めた大男…。

(お、鬼だ!?! 鬼キター!?!)

リーゼント少年は大男に驚いてしまう…。

その次に更なる衝撃が走るのを知らず…

「お兄ちゃん!?!」

ランカが叫んだ。

「「え？」」

リーゼント少年とマミは耳を疑った…。今、彼女はなんと言った？

「お、御兄様ギター！？」

リーゼント少年は驚きの余り口をあんぐりと開けてしまう…。それにこの発言もまずかった…。

「誰が御兄様だ！？やはり貴様ランカに手を出したな！！」

「いえいえ滅相も無いです御兄様！！」

「誰が御兄様だ！！」

とうとうリーゼント少年の胸ぐらを掴み文字通りタコ殴りにしようとした瞬間…

『プット・テイラアアノ・ヒツサアアアツ!!』

どこからか飛んできたストウレインドウームが大男に直撃し、弾き飛ばした。

この時、マミはメダガブリューを構えるランカを見たという…。

「お兄ちゃんのバカ！バカ！バカ！バカ！」

「うわああ！よせランカアア！！！」

そのあと容赦なくピコピコハンマーやらフライパンやら斬バットソード（！？）で大男をタコ殴りにするランカ…。

「あ、あの…もしかして…」

「兄です。」

恐る恐るきくマミはタトバ・ダイナミック・スリーオズマにかけながら答えるランカ…。

「そう、このオッサンはランカの義理の兄貴の『オズマ・リー』だ。」
それにさらっと補足をつける四季…。

数分後…

「成る程…そう言うことか…」

腕を組み、頷くランカの兄ことオズマ・リー…。
その周りには四季とランカとマミとボロボロになり包帯ぐるぐる巻きの倒れているリーゼント少年がいた…。
どうやらリーゼント少年がランカに手をだしたという汚名は晴れたらしい。

「先程は失礼した。俺はスカル小队隊長、ランカの兄ことオズマ・リーだ。」

改めて自己紹介をするオズマ。普通に話しているだけでも迫力を感じ…。

「過保護が悪い癖だけど…」

「ああ…それは見てれば分かる。」

つけたしたランカの説明に大いに頷く四季とマミ…。

リーゼント少年は突然、意味不明の発言をして復活した…。

「俺の名前は如月 弦太朗！！全ての仮面ライダーと友達になる男だ！！アンタとも友達になるぜ！！」

…ぐぐぐ

第一話・日常とイレギュラーとリーゼント（後書き）

今回はバースさんの『フォーゼマガ』から『如月眩太郎』と『バ
マミ』が来てくれました…！！

他にもゲストは多数でる予定です。

バースさんありがとうございました…

え？ほむほむと賢吾はどうした？

実は食堂のドアの影で隠れて眩太郎を見殺しにしました。

ほみら「ふう…危ない危ない。」

賢吾「如月イ…許せ…」

そんなときの様子…

では、次回もお楽しみに！！

第二話、シスコンとリーゼントとイレギュラー（前書き）

今回は数名のコラボキャラが顔だしします…。

四季の本格的戦闘はまだ先かも…

主人公なのに…

第二話、シスコンとリーゼントとイレギュラー

場所は移りゴールドライナー内部…

金色の骸骨のをもした異空間を走るその電車の内部に黒ずくめの男が1人…。

「さて…皆さんもうそろそろ着きますよ。」

彼の名は『商 喜助』。様々な世界を巡り行商をしている男である…。

彼は今、ゴールドライナーに複数の客を乗せている。

「フツ…そろそろか…」

壁に寄りかかっていた高校生ほどの少年は顔をあげる…。すると右は金、左は黒のオットアイのどこか女の子ぽい顔立ちであることがわかる…。

彼の名は織斑 唯。

とあるインフィニット・ストラトスの世界の仮面ライダーオーズである。

「腕が鳴るぜ…」

そのわきのテーブルに座り中学生ほどの赤いメッシュの入った黒髪の少年…。

名は真導 翔夜…。彼もまた幼くもライダーである。

「そう言えば翔夜様？お連れの方がみえませんが…」

商は翔夜に訪ねる。

「ん？ああ雄司か…どっかで落としか…？」

翔夜は別にそこまで気にするような素振りをしない。

その向かいの席にも高校生ほどの外見の少年…。

(俺の力…どこまで届くか試してやる…！)

少年の名は高見大智。彼は心の中で内なる決意をしていた…。

27

一方…

「助けてくれえええええ！！！」

翔夜の連れの少年、『牙島 雄司』は文字通り空から落ちていた…。

「どづいづごったよ！？何でこんな目に…アアアアアアアア…！」

彼はそのまま地面へ向かい落下していった…。

一方…

SMS第3模擬演習場…

((((どうしてこうなった…))))

そこには四季ら先程の食堂メンバーの姿があった…。

そこにはテンションの高いオズマとリーゼント少年こと『如月 弦太郎』の姿と完全に呆れて物言う気にすらなれない四季、マミ、ラシカの姿があった…。

この野外にある演習場は外観は巨大なテニスコートのようだが実は案外、訓練のためにと地面やら何やらに色んな仕掛けがされているのだが…まあそんなことは今は関係ない。

何故今の状態になったかといえばあの例の『キターヽ(^ | ^) /』の後にわざわざ

「俺は仮面ライダーフォーゼだ!!!」

と弦太朗、自ら言ったためオズマが興味を持ち模擬戦を持ち込んだところマミの制止虚しく…

「お兄様！タイムマン張らせて貰うぜ！！」

という訳である。

（ ）（訳がわからないよ。）（ ）

これは四季、マミ、ランカの感想である。

「んじゃいくぜお兄様！！」

「さあ来い！！」

弦太朗とオズマはそれぞれフォーゼドライバーとブレイバツクルを身につける…。

そして弦太朗は4つのスイッチを入れフォーゼドライバーを起動させる。同時にフォーゼドライバーがカウントを始める…。

3
…

2
…

1
…

「「変身!」!」

『Turn up』

『 』

弦太朗はレバーを引き爽快な音と共に光に包まれ、オズマがブレイバックルに手をかけると電子音声と共に彼の目の前にカブトムシを模した絵がついた青白い板が現れる…。

「宇宙キターー!」 (^| ^) /!」

そして弦太朗は白いとんがり頭の宇宙飛行士ライダー、仮面ライダーフォーゼに…

「つあつ！！」

オズマは板を突き抜け青のスピードAの騎士のライダー、仮面ライダーブレイドへと姿を変える。

「はっ！！」

2人は互いにぶつかりあうと拳を組み合い、そのあと後ろへ跳び両者間合いを取る…。

「仮面ライダーフォーゼ！！タイムン張らせて貰うぜ！！！」

そして片方の拳をつきだすフォーゼ。

「スカル小隊リーダー、仮面ライダーブレイド！！正々堂々勝負だ！！！」

それに応じて構えるブレイド。

2人は再び向かっていき拳を突き合わせた…。

その頃…

「やってられっか…」

四季はシスコンとリーゼントの戦いを見守る気持ちは毛頭になくMSの周りをうるうるしていた…。

「さて…これからどうしよ…んん？」

ここで四季はある人物を見つける。

「あれ…こつちじゃねえのか…？」

1人のどこか一昔前のレトロさを思わせる黒い服装とソフト帽を被った男がいた…。どうやら何かを探しているようだ…。

「おい、あんた…探し物か？」

早速、話かけてみる四季…。

「ん？ああ…まあ、そんなところだ…。人を探してるんだ…。」

「人？」

男の反応に疑問を浮かべる四季。

「あなた…西門 四季って知らないか？」

「それは俺のことだが…」

「あんたが？その依頼人から贈り物が届いてる…。」

「？」

そう言つて男が懐から出したのは一枚の小綺麗な招待状だった…。

(俺宛…?)

四季は早速内容を読んでみる…。

西門 四季様

またの名を仮面ライダーディケイド・ブラット様、『バトルカーニバル・トーナメント』への招待状でございます。是非ともご参加下さいませ…。

なお、優勝者には金一封と名高き栄誉が得られるでしょう…

会場はライダーコロシウムです…。

日時は明後日の正午です。

「何じゃこりゃ？」

四季にとってこれは本日三度目にあたる訳がわからない物だった…。

「実は俺にも同じような奴が届いてる…。」

そう言い懐から先程同様の招待状を出す。

「あんたも…てことはアンタ…。」

「そう、俺は左翔太朗…仮面ライダージョーカー…!!」

これが四季と仮面ライダージョーカーこと左 翔太朗との出逢いであった…。

その頃…

SMS第3模擬演習場…

「ふっ！はっ！…てや…！」

「甘い…！」

ドカツ…！

「ぐわあ…！」

フォーゼは拳やら蹴りやら繰り出すも動きが読まれ空振りしたところをブレイドの強烈なカウンターの拳を食らってしまっ…その繰り返しが続いていた…。

「そんなもんかお前は…！踏み込みが甘い…！」

「へへッ…！見くびっちゃ困るぜお兄様…！」

『ランチャー・オン』

『ガトリング・オン』

フォーゼは仮面の下で不敵な笑みを浮かべるとベルトのスイッチに手をかけ右足にガトリングモジュール、左足にランチャーモジュール

ルが装備される。

「オラ！」

ズダダダ！！

バシユバシユ！！

そしてフォーゼは弾丸とミサイルをブレイドに向けて放つ。

「くっ！！」

『Metal』

それに反応したブレイドは腰から即座にブレイラウザーを外しホルダーを展開するとラウズカードを1枚、ラウザーにスラッシュ読み込ませる。

ズガアアアーン！！

それとほぼ同時にフォーゼの放った弾丸とミサイルが爆発を起こす。

「お兄ちゃん！！」

「弦太郎君やり過ぎです！！」

ランカとマミの叫びが響く。

「いや…まだだ…」

だがフォーゼは感じていた…爆煙の向けて向こうでブレイドは立っている…

『Absorb Queen』

その予感が的中するかのように電子音声が爆煙の向こうから響く…。

『Fusion Jack』

そして黒煙を突き抜けるように羽ばたく金色の閃光…。

「気に入った…。俺の全力の技…見せてやる!!」

それは鎧が金色に染まり銀に赤いラインの入った六枚の翼を羽ばたかせたブレイドの強化形態…『ジャックフォーム』であった…。

「なら俺も飛ばせて貰うぜ!!」

『ロケット・オン』

フォーゼもランチャーとガドリングを解除しフォーゼドライバーの右側のスイッチを押す…。すると右腕にロケットモジュールが装着される。

「いくぜ!!」

『ドリル・オン』

『ロケット』

『ドリル』

『リミットブレイク』

「ライダーアアアロケットドリルキック!!」

そして空へ飛び上がると左足にドリルモジュールを装着。そのままフォーゼドライバーのレバーを引きモジュールの出力を上げる。

「勝負だ!!」

それに応じてラウズカードを二枚、ジャックフォームにより金色の延長されたブレイラウザーに読み込ませるブレイドJF。

『Thunder』

『Slash』

『Lightning Slash』

「「「うおおおおおおおおおおおお!!」」」

ズガアアアアーン!!

そして2人の必殺技がぶつかり激しい爆発を起こした…。

その頃…

カフェ『スプリング』…

「…」

四季と翔太郎は目の前の光景を理解出来なかった…。

四季に関しては理解したく無かった…。

何故なら…

「…！！…！！」

店には大穴があき店内は滅茶苦茶…。四季はもはや絶句している…。

「いや…その…ドンマイ。」

翔太朗もこの言葉が限界である…。

「はは…一応カウンターは無事だからコーヒーぐらい…んん？」

カウンターに向かおうとした四季が瓦礫の中で蠢く何かを見つける…。

それは…

「いや〜クウガって意外と丈夫なんだね〜。」

それは先程落下していた少年、雄司であった…。

そして彼を見た瞬間、四季の何かが外れた…。

同時刻…

カフェ『スプリング』の通り…

「やっと着いたよ〜!!」

銀色のオーロラから黒い短い髪を花の髪飾りでとめた少女がリュックを背負い歩いている…。
彼女の名前は『松永 昴』。彼女もまた招待状を受け取ったライダーのうちの1人である…。

「さて…大和たち来るのも時間がかかるようだし少し時間を潰し…」

『アアアアアアアアア!!』

「え？何！？悲鳴!？」

突如響く悲鳴…。声からして恐らく少年だろう。昴は一目散に悲鳴のした方向へ走る。

そして目にしたのは…

「落ち着け四季!!」

「放せ!!放せ!!俺はコイツをムッコロスウ!!」

ブチキレた四季とそれを羽交い締めにして抑える翔太郎であった…。

第二話 シスコンとリーゼントとイレギュラー（後書き）

コラボして下さった作者様で自分のキャラがまだ出てない作者様…

恐らく次の話あたりで出番があるはずですよ…！！

それでは、

次回もお楽しみに！！

第三話、集結と特訓とお仕置き（前書き）

もう大半がコラボがしめているこのスパロボ状態…

自分のキャラよりコラボキャラが多いというこの状態…。

エントリー…そろそろ締め切るっか…

第三話、集結と特訓とお仕置き

SMS 教導舎前…

「そら1、2…3…」

1人の青年が手やら足やらが機械のスーツ…EXギアを装置し歩いていた…。
本来ならば装着者の意識に反応して翼とブースターで飛行や専用の宇宙服で活動が可能になる代物だがあくまでもそれは電源がついてればの話…。ついていなければただの全身にまとわりつく重りではない…。

しかし、それを耐えきれなければ彼の目標とするライダーシステムへの到達はほど遠い…。だから、青年、『早乙女 アルト』は今日も特訓へ精進しているのである…。

「よし、これ…で…ラスト!…」

そして教導舎前にたどり着き手をつくアルト…。

その際、彼のポニーテールに纏めた美しい黒髪がしなやかに落ちる。

「お疲れ様スカル4…。」

「!、キャシー中尉!…」

そこへ蒼眼、栗色の毛のグラマラスな女性がやってくる…。彼女はアルトの上司であるキャシーである。上司と言っても彼女は政府の人間でありいわばオーナーと労働者みtainなものである…。

「でも、3メートル不足よ。それに手をついたからプラス一周！」

「!!くっそオオオ!!」

そしてアルトはキャシーからの残酷な通知の受け更に一周廻る羽目になった…。

「まあまあキャシー中尉それくらいでええやないか。」

「八神三佐…」

そこへボブの髪型の女性がやってくる。彼女は『八神 はやて』。

実はなのはや四季とも友人であり現在はSMSに勤務している。

「それに、折角のアルト君の美人さんが台無しや。」

「!!」

誰が女だ!!…と叫びたかったアルトだがはやては上司なため軽はずみな発言は出来ないため恨めしい目をして黙る。それほどアルトの顔は美しく整った女性の顔付きをしているのだ…。

まあそれは置いておいてはやてはキャシーと話を始める。

「それよりキャシー中尉、聞いた？オズマ君、なんや客人とバトル起こしたらしいで…」

「え！？あの馬鹿！！」

「まあ、落ち着き。バトルといっても文字通り戦闘…」

「ええ！？」

「話は最後まで聞き！！」

血相を変えるキャシーを肩を掴み落ち着かせるはやて…。

「でな、その客人がライダーらしくてオズマ君が勝利して終わりかと思ったんやけどどうやら教導をその客人申し込んだらしくて…その…オズマ君に…」

「それってアイツらの事か？」

「「え？」」

アルトの言葉に耳を疑う2人…。そして、彼の指さす先に…

「特訓、キター！！＼（＾|＾）／」

「な、何であたしまで…」

そこにはEXギアをアルト同様に取り付けた弦太朗とマミの姿があった…。

時は約6分前…

弦太朗はオズマに敗れ去り伸びていた…。

「まだまだだな…」

オズマはその場をあとにしようとした…

が…

「ま、待ってくれ…」

よろよろと立ちあがる弦太朗…。

「ほう…まだ立ち上がるか…。意外にタフだな。」

弦太朗の変身を強制解除するほどの攻撃を受けても立ち上がるタフさに驚嘆の声をあげるオズマ…。

「お兄様…アンタつえな……」

「ふん、伊達にスカルリーダーと仮面ライダーをやって無いからな

…。」

「なら…1つ頼みがある…」

そこで弦太郎は地面に手をつき…

「俺を…強くしてくれ!!」

「「「!?!?!」」」

弦太郎の発言にこの場にいた全員が硬直した…。

「…弦太郎と言ったな…何故強くなりたい?」

オズマは冷静に聞き返した…。

「俺はこのままじゃカーニバルで勝つことも出来ねえ…それだけじ

やねえ！！俺にだって大切な仲間が…ダチがいるんだ！！だから…このカーニバルを勝ち上がれるだけの強さが無きゃこれからも俺の大切なモノを守ることが出来ねえ…。アンタは俺より強いし経験もある！！だから、俺に…力を貸してくれ！！」

「…」

弦太郎の言葉にしばらく黙るオズマ…

しばらくして…

「良いだろう…：そう言うならばそれなりの覚悟が出来ていると見た。しかし、やるからには容赦はしない！！」

「よっしゃ！！…マミ、一緒に頑張ろうぜ！！」

「え！？何で私まで！！」

「細かい事は気にすんな！！…そんなじゃ…：特訓キタアアア！！」

そして、マミまで巻き込み弦太郎の特訓は始まったのである…。

その頃…

カフェ『スプリング』

「お助けええええ！！！」

落下少年、雄司は怒り狂う四季から逃れようとしていた…。

「放せゴラア！！！」

そしてとうとう四季は翔太郎を引き剥がし目を怒りで光らせる。

「ひいい！？こっち向いたアア！！！」

雄司は四季に怯えながら通りを走る走る…。

「逃がすかよ…。」

四季はどこからガトリングガンを二丁を取りだし両手で持ち盛大にぶっ話す。

ズダダダダダダダ…！！

「うわっ！！ちょ！？危な！！ん？待てよ…」

ここで雄司は何を思ったのか腹あたりに手をあてがい銀色の丸い宝玉のついたベルト、アークルを出現させる。

「超変身！！」

そして彼は金色の角紫の複眼に銀色の鎧に紫のラインが入った戦士、仮面ライダークウガ・タイタンフォームへと変身する。

「へへ…これなら豆鉄砲ぐらい痛くもかゆくも…」

だが彼は予想していなかった…。

次に飛んできたのは…

「スーパーど ん波！！」

であること…

チュドーン!!

「ギャアアア!!」

こうして彼は昴が止めに入るまで制裁を四季から食らったという…

その頃…

別の通り…

「ここか…」

金髪の少年が銀色のオーロラを通り抜けやってきた…
少年の名は『天田 空』…

彼も弦太朗同様、招待状をもらいやって来た異世界のライダーである。

「さて…どうしようか…」

そう思った矢先、彼は目の前から一直線に走ってくる異形に気づく…。

「あれは…」

それはユニコーンを模した異形、ユニコーン・ゾディアーツであった。

「まさか、こんなところでゾディアーツを相手にするとは…」

空はそう言うとフォーゼドライバーを取りだし…

「『サイクロン・エクストリーム!』!」

『ぐわああ!?!』

ドゴオオン!!

「なっ!?!」

たがその前にユニコーンZは何者かに撃破されてしまった…。

「『さあ…お前のを数えろ！』」

撃破したのは右側が緑、左側が黒のライダーであった…。このライダーの名は『仮面ライダーW』。オズマのブレイド同様、この世界のライダーである。

「ふう…」

そしてWは変身を解除すると装甲は風に舞う塵の如く霧散する…。そして現れたのは髪の長い、まるで翔太郎を女にしたような女性であった…。

「さて…依頼は完了…んん？」

「む？」

これがWの左側の女『左舷 翔子』とこの世界に来た3人目のフォーズ『天田 空』の出会いであった…。

とあるダークキバの世界…

「〜」

『にゃあ〜』

淡い緑色の髪をツインテールにした紫と青のオットアイの少女が歩いてきた…。

彼女の名前は『アインハルト・ストラトス』。そして彼女の肩には可愛い子猫のような相棒、『ティオ』が乗っている…。

そして今、彼女はご機嫌なのである。何故か？知らん。

そんな彼女の前に…

「お前…登 オトヤの友人だな。」

「『…』」

突如、黒髪で細身の大男が現れる…。

思わず警戒体制をとるアインハルト…。

「貴方は誰ですか？それにオトヤ君に何の用ですか？」

『にやにや？』

「あ！テイオ！！」

しかし、彼女は警戒するどころか男の前に寄っていく…。

「ほづ…俺に同じ匂いを感じたか…なら、この姿に変わるか。」

そう言うと男は青白い光に包まれその姿を変える…。

「…！」

その後、男は白に蒼い縞の模様の入った獣…例えるならジャガーに近い容姿になる。

『言い忘れたな…俺の名前はハヤト…どうした嬢ちゃん？』

獣の姿に変わった男、ハヤトであったが突然自分に向けられている視線が変化していることに気がつく…

「か…」

『か？』

「可愛いです…!」

『ウエ?』

『にゃ?』

このあとハヤトはしばらくメインハルトに撫でまくられていたとい
…っ

場所は戻り四季の世界…

時刻はすでに夜…

その夜の闇に紛れるかのように出現する銀色のオーロラ…。
そこから2人の男が現れる…。

「祭りの場所はここか…」

1人は蛇革の衣装を来た髪がボサボサの狂暴そうな男…
彼は『浅倉 威』。

「さて…面倒臭いが沈めてやるか…」

もう1人は茶髪のオールバックの男…『二宮 鋭介』。

その様子をビルの屋上から確認する男がいた…。

長い赤毛に浅黒い肌をした男は狂暴な笑みを浮かべ夜の街に叫んだ…

「始まるぜ…ライダー同士のとんでもない戦いがよお…！」

第三話、集結と特訓とお仕置き（後書き）

そろそろトーナメント篇に入りますね…。

コラボして下さった作者様、と読者様楽しみにして下さい…。

第四話、襲撃者（前書き）

最近、オールライダー中心…

そろそろ紅蓮の破壊者、本編投稿しないと…

第四話、襲撃者

鳴海探偵事務所…

「へえ…フォーゼねえ…」

翔子はオーロラを渡ってきた空を事務所に招き入れ話を聴いていた…。

事務所と言っても無機質な空間では無く緑を基調としたフロアで妙にフカフカそうなソファアがありどちらかというと一般家庭のリビングを思わせる…。

「はい、それで今回は良い経験になると思いましたカーニバルに参加しよう…」

空もソファアに腰掛けて話している。

「でも正直、私はカーニバルに出るのはオススメしないわ…」

「え？」

突然の翔子の言葉に戸惑う空…。

「このカーニバルっていうのは確かにお祭りのように聞こえるかも知れないけどこの大会…かなりキナ臭いわ…。調べてみたら主催者なんての名前なんてでたらめ…明らかに裏で糸を引いている奴がいるのは確かよ。」

「それなら止めないと…！」

「馬鹿ね…別の世界の貴方たちのようなライダーにまで収集をかけているような奴らよ。真つ正面からいったら間違いなく潰される…」

翔子はため息をつきながら言った…。彼女もどうにかできるものならともどかしく思っているのが伺える…。

「アンタが言ってた『ゾディアーツ』だっけ？あの類いの連中も最近でてきた奴らでね…今回の話で間違いなく別の世界の産物であることはわかったわ…。ありがと…」

「い、いえ…あ！」

突然、何かを思いだしたような声をあげる空…。

「ぼ、僕……………今日の宿が…無いです…」

そう、これは彼にとっては切実な問題を思い出したのだった…。

「あ、ならうちに泊まる？」

「え？」

「ウチには今、フィリップしかないし私の旦那も今日は帰ってこ

ないし晩飯代1人分ぐらい余裕はあるわ。」
慌てる空を見かねて提案をだす翔子。空も遠慮しようとはしたが断
われば寢床が無いため翔子の言葉に甘えることにした…。

一方…

カフェ『スプリング』…

「放せ！放せ！俺はコイツをムッコロス！！」

「落ち着け！ガキ相手にそこまでキレるな！！」

「そ、そうだよ！雄司君だってわざとやった訳じゃないし！」

四季をなだめる1人の青年と少女の姿があった…。
翔太郎と昴である。

「ヒイイイ…！」

雄司は鬼の形相の四季に怯えている…。

そこへ…

ヒュルル…ズゴーン！

「くっくっ！」「くっく」

またもや空から落下してくる者が…

「ゲホ、ゲホ！おっ昇…追い付いたぞ…！」

「大和！」

「くっ…まさか落下とは…！」

スプリングを破壊しやって来たのは1人の少年と女性…。
少年の名は『直江 大和』。女性のほうは『川神 百代』。どちら
も昇のもといいた世界の善き仲間である。

「皆、無事あえて良かった…！」

再会を喜ぼうとした昴はここで異様な空気に気づく……。

ギギギギ……

恐る恐る後ろを見る昴、大和、百代……。その瞳に移ったのは……

「卵とじに……してやるのか？」

両手をあわせ謎のオーラを発する黒いエネルギー体を形成している四季の姿があった……。

それを見た雄司は

「あ、あれは『ダークマター』！？暗黒面の闇物質が何故ここに！？」

訳の解らないことを言い出した……。

「お前が元凶だろうがー!!」

ここで翔太郎のツッコミが炸裂する。

「さあ…地獄を楽しみ…」

「ぬあああああ!?!」

「!?!」

ズゴーン!

そのダークマターを四季が放とうとした瞬間…再び、スプリングに落下する者が1人…。しかも、これでスプリングの大半が崩れてしまった…。

「いってえ…あのクソ神…。」

立ち上がったのは少年…見たところ高校生のようでそこそこ美形…右手に何やら包帯をしているようだ…。

「さて…コウモリも探さなきゃならんし…ウエ?」

ここで少年は周りの異様な空気に気づいた…。何故なら周囲の人物

が『ああ…やっちゃまった…』という視線を向けてきたからだ…。

「あ、俺何かした？」

「「「うん。「「「

「マジで…?」

少年の疑問に昴、大和、百代は同時に頷いて答える…。

「まあまあ、落ち着けよ四季……四季……?」

四季をなだめようとした翔太朗だがそこに彼の姿はなかった…。どこにいったかと辺りを見回すと…

「オーナー…今、そっち逝くよ…。」

もれなく首吊り自殺を謀ろうとしていた…。

「うおおおお！？よせええええ！！」

翔太郎は急いで羽交い締めにしてそれを阻止に入った…。

世界は代わり

とあるダークキバの世界…

少年、『登 オトヤ』は相棒の黒いコウモリ『ダキバット』を連れ公園に来ていた…。

ここで彼は異様な気配を感じとったからである…。

『おかしい…気配はあるのに何もないだと…』

「確かにおかしいね…『ネオ』にしては妙だし…」

この世界には『ネオファンガイア』と呼ばれる怪人がおりファンガ

イアの人のライフエナジーを喰らうという特徴と倒すとカードになるというアンデットの特徴を掛け合わせたような怪人であり、オトヤはダークキバに変身しそれらを倒してきた…。

『だが気配があるからには放置する訳もいかんしな…』

「そつだよね…でも何かネオとは違うような…」

ピキキキ…

「『…』」

この時…

ガラスにヒビが入るような音がした…。

反射的に空を見上げるオトヤ…。見ると空に文字通りヒビが入っていた…。

「ダキバツト…」

『ああ…あれは間違いなくヤバいな。』

ガシャ…!!

オトヤたちの予想が的中するかのように空が砕け『何か』が落ちてきた…。

それが人だと認識するのに数秒かかった…。

「ここは…過去…か？」

落ちてきた人はオトヤの目の前に舞い降りた…。

その人は美しい黒髪で紅い瞳…端正な顔立ちはまさに美男と呼ぶに相応しい。

「そのキバット…君は…『偽りの帝王』か？」

「！」

男はオトヤのことを『偽りの帝王』と呼んだ。思わず距離をとり警戒するオトヤ。

「アンタ…一体何者だ…！」

「僕かい？僕は…」

喋りながらディエンドライバーと酷似した黒い銃を取り出す男…

「通りすぎり…いや、放浪する破壊者さ。君の魂もらいつける…！」

『KAMEN RIDE』

そしてカードをどこからかとりだし装填する。

「狩れ…ディロスト…！変身！」

『DE・LOST』

そして引き金を引くと彼に幾つもの影が重なっていく…。それは鎧となるとディエンドに酷似した漆黒のライダー『仮面ライダーディロスト』となる…。ディエンドとの違いは余りにも刺々しくベルトにケータッチらしき物がついているということだ…。

「やる気は満々のようだな…。仕方ないダキバット！」

『ガブリ！』

オトヤも応戦すべくダキバットに手を噛ませる…。すると彼の顔にステンドグラスのような模様が現れ彼の腹部に鎖が巻き付きベルトへと変わる。

「変身！」

そして彼はコウモリを思わせる紅い鎧に緑色の複眼、そして黒いマントをなびかせたライダー、『仮面ライダーダークキバ』に変身する。

『光栄に思え！絶滅タイムだ！』

「フフ…終わるのは君かな？」

「っ…」

一瞬…デイロストの言葉に畏縮してしまったダークキバだがすぐにザンバットソードで斬りかかる…

だが…

「甘いね…」

「！」

切っ先を紙一重でかわしデイロストは空振った斬バットソードを足で踏みつけ地面へ深く突き刺し変身ツールに使った銃『デイロストドライバー』を突き付ける。

「どうしたんだい？これで終わりかい？」

「くっ！」

ひとまず距離をとるダークキバ…。

「ならこれでどうだ！」

『ガルル・ソニック！』

左腕のタツロットに似た機械『ネオロット』にカードをラウズするダークキバ…。

すると、マントが弾き飛び胸部に毛皮が纏われさらに左側が野獣の爪のように刺々しく、複眼も青く変化する。

仮面ライダーダークキバ・ソニックタイプ…

原典のダークキバには無い力…

速さを活かした戦闘を得意とする形態である…。

「速さなら速さだよな。」

それを見たディロストはベルトのケータッチらしき物『ロストタッチ』に触れる…。

『DARK KABUTO…KAMEN RIDE HAIPPEE

R』

するとロストタッチから電子音声が響きオオヒイロカネの装甲がディロストを包む…。

そして、その姿は一瞬、ダークカブトに変身するとその特徴的な黒い角は延長され胸部の赤い基盤のような模様の入った鎧にさらに赤い追加装甲が形成され、それが腕や足、背中にも同様に追加され『仮面ライダーディロスト・ダークハイパーカブト』へと姿を変える。「なっ!?!」

一瞬、驚きを見せたダークキバ。その隙をDLHダークカブトが見

逃す筈もなく…

「君の…敗けたよ…」

「！」

気づいた時にはダークキバの後ろに回りこみディロストドライバーを突き付けディロストの姿に戻る。

「残念だよ…今の君じゃ狩る価値も無い…。この世界の『白い魔王』と『不屈の白』との息子と聞いていたのに…やはり君は僕の求める『欠片』ではない…。」
そう言うとディロストは黒いオーロラを出現させその中へ去っていった…。

「何なんだアイツ…」

一難さつたことにより変身を解除するオトヤ…。ダキバットも不安そうに周りを飛び回る…。

『解らん…いずれにしても…』

シュタツ

「『！』」

そこへ、あることかまた1人招かねざる客が…

「オトヤ君大丈夫ですか!？」

「え?アイン?」

ではなくアインハルトであった…。髪が何故か青いし何故かここに
来たスピードが尋常じゃなかった…。

『おい、アインハルト。ユニゾンを解くぞ。』

「あ、はい!！」

『よし、オープン・ゲット!』

突如、アインハルトから謎の音が響くと彼女の中からジャガー形態
のハヤトが飛び出す。するとアインハルトの髪が薄い緑色に戻る。

「紹介しますね。ハヤトさんです。」

オトヤにハヤトを紹介するアインハルト…。しかし、ハヤトはそんなことは気にせず余りの速さに酔ってしまったティオを弄んである…。

「ええと…アイン？来る速さが尋常じゃなかったんだけど…」

ふと思つた疑問を聞くオトヤ。

「それは、ハヤトさんのおかげです。ハヤトさんとユニゾンすると移動速度が速くなるらしいんですよ…。」

『まあ、鍛え足りぬ奴は筋肉が弾けとぶか内臓潰れてお陀仏だがな…』

さらつと恐ろしいことを付け加えるハヤト…。

『この嬢ちゃんは大したもんだ。お前も少し見習つたらどうだダークキバ？』

「はは…考えときます。」

ハヤトの提案に曖昧に答えるオトヤ。

そこへ…

「登！！」

1人の少年と青年がやってきた…。1人は仮面ライダーカリスの少年『剣立 ハジメ』。もうひとりとは仮面ライダーバスターの青年『

加藤 ヤマト』である。

「ハジメ…ヤマトさん…」

「登…さっきの…」

「ああ…それは運良く退いてくれた…かな…でもネオじゃなかった。

」

「！」

ハジメの質問に答えたオトヤ…。その顔は微かな恐怖と悔しさに歪んでいる。このことからハジメは敵は今まで相手をした奴とは異次元…そしてダークキバが全く歯がたたなかつたを察する事ができた…。

「ええと…そちらのお方は？」

この重くなりつつある空気の中、ハヤトの事がきになるヤマト…。

『俺はハヤト。よろしく…仮面ライダーバスター。』

「え？俺のこと知ってるの？」

『勿論…。お前ら3人は招待状をもらったライダーだからな。』

「」「？」

ハヤトがそう言つと銀色のオーロラが現れその場にいた全員を飲み込んだ…。

その頃…

ゴールドライナー…

『はい、どつぞ。』

「ああ…すまない…。」

唯はタキシードを着こなした金色の骸骨のイマジンからコーヒーマスターをもらっていた…。彼の名は『ゴルゾ』。ゴールドライナーの従業員のイマジンである。

「皆さん…もうそろそろ着きますよ…。」

商の声と同時に響き同時にゴールドライナーが減速する揺れがはしる…。

そして、ゴトンと大きく揺れるとゴールドライナーが停車する。

「さて…皆様、ゴールドライナーのまたの利用……んん？」

乗客を降ろそうとした商だったが突然、何かを感じ取ったかのように動きを止める。

「どっした？」

翔夜が商に訪ねる…

「いえ……『招かねざる客』が来たようです…。」

ズドン！！

「！！！！？」

商が答えたのと間を置いて激しく揺れるゴールドライナー。

同時に外へ飛び出す商とゴルゾ。そこは広場だった…。そして、その上空に人影があった…。

「『資格者』、君とその乗客の魂…もらい受ける…。」

その影の正体はオトヤを襲ったディロストの青年であった…。

第四話、襲撃者（後書き）

仮面ライダーディロスト

謎の青年が変身するディエンドを黒く刺々しい外見のライダー……。ベルトのロストタッチに触れ自身を他のライダーの最強形態に変身することが可能。

ディエンド同様の召喚能力を持たないが戦闘能力はあらゆる者を圧倒し恐怖におとしめる。

話した内容から何らかの手段で未来から来たものと思われるがその目的は謎。

ライダーや特定の人物を自分なりのニックネーム（？）をつけて呼ぶ。

第五話、応戦（前書き）

ディロスト…

ぶちこむんじゃなかった…

全然カーニバル篇いけない…

てかディロスト、マジチート

第五話、応戦

「狩れ…ディロスト!…変身!」

『KAMEN RIDE DE・LOST』

青年はディロストへ変身し戦闘体勢へ入る…。

「仕方ないですね…。ゴルゾ、準備はいいですね?」

『オーライマスター。』

ため息をつきながら自分のシルクハットを外すとそこから電王ベルトを取り出す商。

彼はそれを装着しパスをかざす…

「変身!」

『GOLD form』

電子音声がすると彼はほぼ電王系のライダーの基である形態になると金色のデンカメンが装着されていく…。

「貴方の価値…いくらですか?」

そして、彼はNEW電王と色違いの酷似したライダーになる。

違いは黒を基調にしており複眼や尖った複眼など至るところが金色

ということだ。

『ふっ！』

同時にゴルゾも飛びあがり金色の大剣『マチューンゴルゾンバー』へ変形する。

鐔はゴルゾの頭をモチーフにした骸骨で非常に悪趣味全開である。

このライダーの名は『仮面ライダーゴールド電王』。商の戦闘においての力であり金色などの装飾は彼の趣味である。

「商！」

ゴールド電王が構えると同時にゴールドライナーから唯を始めとする乗客メンバーが出てくる…。

「ほう…『蝕まれし欲望の王』に『破壊者の継承者』…それと『陰陽の羅針』か…」

出てきたメンバーを興味深い目で見るディロスト…。

その途端、思わず萎縮してしまふ乗客メンバー…。

「コイツ…ヤバイ!？」

ほぼ反射的にBESTバツクルを装着する大智。ベルトの右側の箱形パーツから飛び出したカード…『BESTカード』をスラッシュし彼から見て左側に傾ける。

「変身！」

そして彼は黒い塊がまわりジョーカーに似た黒くスタイリッシュなデザインのライダー…『仮面ライダーBEST』に変身する。

「君は…」

ディロストはBESTの前に舞い降りる。BESTはディロストを指差す。

「BEST……つまり一番」

「知ってるよ。『陰陽の羅針』。でも一番というのは間違っているよ。何故なら…」

しかし、BESTのセリフが言い終わる前にそれを遮るディロスト…。

『ATTACK RIDE…』

「僕にすら勝てないのだから」

『SLASH』

「！」

そして一瞬で間合いを詰めディロストドライバーから伸びた刃を振る。

それを間一髪でかわしたBEST。そして、バックステップしディ
ロストに構える…

が…

「見たのはそれだけかい？」

「！ぐわああああ！？」

ズガガガガガ…！！

まるで時間差で凄まじい斬撃に教われるBEST。あまりの大きな
ダメージで動けなくなってしまう…。

「ぶん…」

見るとディロストの紫の刃はドライバーだけではなく左手や足の爪先からも生えていた…。

「っ…！」

「！」

ゴールド電王も切りかかるがディロストはそれをドライバーでゴルフゾンバーを受け止め回り蹴りで弾きとばす。

「次は…君だ…。」

「！」

今度は翔夜を獲物とするディロスト…。

「くっ…！」

そして翔夜は白い部分が赤く変化したディケイドドライバーを身につけハンドルを開く。

「変身！」

『KAMEN RIDE DECADE STRIKE』

すると翔夜に11枚の影が重なりグレーの鎧に緑の複眼が形成され頭に何枚か赤い板が刺さり装甲が赤く染まる…。そして彼はディケイドのマゼンタの部分が赤くライダーに変身する。『仮面ライダーディケイドver.ストライク』…翔夜の戦う姿である。

「デイケイド・ストライク…『破壊者の継承者』。君にはハンディをつけよう…」

デイロストはデイケイドSの変身を見届けると腰の右側にぶら下げているカードホルダーから1枚のカードを抜きデイケイドSに投げ渡す。

「っ!?!これ…」

そのカードはカメンライドカード…デイケイドやディエンドタイプのライダーが他のライダーに変身したり召喚したりするのに必要な物である…。

「舐めるなああ!！」

「まて!挑発にのるな…」

唯の静止も聞かずカードを投げ捨てデイケイドSは突っ込んでいく…

「青い…身の程知ることだ…」

バンバンバンバン!!

「ぐわああああ!?!」

しかし、デイケイドSは近づく前にデイロストドライバーからの弾丸に弾き飛ばされる…。

「くっ…っ…っ…」

痛む身体を押さえ立ち上がるうとするディケイドS…。その時、彼の視界にディケイドの投げたカードが目に入る…。

(くそ…胸くそ悪いが…)

ディケイドSは立ち上がるとカードを拾いディロストへ再び向かっていく…。

「一かバチか…!!」

『KAMEN RIDE ETERNAL』

再度、バックルを展開しカードを装填するディケイドS。すると木枯らしが発生し白くシンプルなデザインの装甲が形成されていく…。そして、両腕や手首や手足に青い炎の模様が施され仮面も白く複眼が『』を模した三本角の仮面に変化。さらに胸、右腕、左足、背中にマキシマムスロットと黒いローブが精製される。

ディケイドSは仮面ライダーエターナルの姿を借りたDSエターナルへと変身したのだ…。

「はあ！」

マキシマムスロットのついたナイフ型の武器『エターナルエッジ』を逆手で構えディロストへ突撃していくDSエターナル。ディロストも弾丸を放つがDSエターナルはそれをローブで弾き懐に飛び込む。

「はあああああ!!」

エッジを振り回しディロストを切りつけようとするDSエターナルだがひらりひらりとかわされてしまう…。

「いいよ…僕も楽しくなってきた…。」

「このっ…このっ！」

そのやりとりがしばらく続くとDSエターナルの腕を掴むディロスト。

「そろそろチェックメイトだ。」

「！」

思わずライドブッカーに手をかけるDSエターナル…。それよりディロストがディロストドライバーの引き金を引くのが早かった。

バアアアアアアン！！

「があああああー！！」

とうとう変身解除し元の姿に戻り地面に転がる翔夜…。

同時にエターナルのカードは本来の主であるディロストの手元に戻る。

「さて…お次は『蝕まれし欲望の王』、君だ…。」

「！」

とうとう狙いを唯に変えるディロスト…。

(手を抜いたら確実に殺られる！！最初から全力で！！)

唯はオーズドライバーを装着。緑のメダルを3枚セットしスキヤナ
ーを滑らせる。

「変身！！！」

『クワガタ！！カマキリ！！バッタ！！ガクタ・ガツタ・キリバ！
！ガタギリバ！！』

三枚の緑色のメダルの幻影が縦三列に並び一つになり唯の胸に当た
ると黒いスーツと各部パーツが形成される。

オレンジ色の複眼に天をさす双角…クワガタベッド

リーチは短めだが切れ味は凄まじい腕に装着されたカマキリソード

バッタのように強靭な脚力を誇るバッタレッグ

唯は『仮面ライダーオーズ』の緑のコンボ『ガタギリバコンボ』へと変身した。

「はあああああ!!」

オーズ・GKBは分身を数人作り出しディロストを囲むと一斉に飛びかかる。

「舐められたモノだね。数で押せば勝てるっても?」

ディロストは半ば呆れたような声をだすと1人つつ確実に撃ち抜き、確実に退ける。

「んぐ…!?」

その衝撃で1人に戻るオーズGKB…。

「フフ…」

ドカツ!!

「ぐふ!?」

さらに距離を詰めなんと左腕をオーズの胸部へ突っ込むディロスト…。

「君はこの『紫の力』に恐怖しているようだね?なんなら僕がこのまま引き抜いてあげようか?」

そして、ディロストは唯の中にある物を掴んだ…。
「！うわあああ！？」

思わずディロストを蹴り飛ばすオーズGKB…。そして、メダルを黄色いメダルに入れ替えスキャナーを滑らせる。

『ライオン！！トラ！！チーター！！ラッタ！！ラッタ！！ラトラ
ッタ！！』

オーズは黄色のコンボへと姿を変える。

獅子を模した青い瞳のライオンベッド

腕に装着されたトラの爪のような武装トラクロー

チーター如き俊敏さと素早さを可能にするチーターレッグ

オーズ・ラトラーターコンボだ。

「合わせるぞー！ー！」

「了解いたしました…」

『スキヤニングチャージ!!』

『Full Charge』

それぞれスキヤナーとパスをバツクルに滑らせるオーズLTRとゴールド電王…。

「はあああああ!!」

「…」

オーズLTRは必殺技『ガツシユクロス』の体勢に入り目の前に金色の我が3つ形成されディロストに向け並ぶ。ゴールド電王はゴルゾンバーを寝せて構えフリーエネルギーが溜まると突撃の体勢をとる…。

「フフ…」

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DE - LOS
T』

それを見たディロストはファイナルアツクライドカードをディロストドライブへ装填する。

そして勢いよく突っ込むオーズLTRとゴールド電王しかし、ここでデイロストは予想外の行動にでる。

「足元…気を付けなよ？」

「「！」「」」

ズガアアアン！！

なんとデイロストドライバーから放った巨大な紫の弾丸を地面に目掛け放ったのだ。勿論、足場は悪くなるに比べ爆風により体勢の維持は困難になる。

「終わりだよ…」

デイロストはそう呟くと背中から半透明の長方形のような紫の翼を広げゆつくりと浮かびあがる…。

「さあ…絶望の時だ！」

そしてデイロストドライバーに紫の光を放つ刃を形成するとそのままオーズLTRに突っ込むデイロスト…。

「！」

ダン！

しかし、すんでのところでゴールド電王が身代わりになる。

そして…

グシヤッ…

ゴールド電王のベルトに刃が突き刺さった…。

それだけでは終わらない。そのままディロストはゴールド電王ごと空へ舞い上がり流星になる…

そして、空に『』を描くと文字通り隕石が如く赤く発光し落ちてくる。

ズドオオオオオオン！！

「ぐがわあああああ！！」

そして、ゴールド電王の断末魔が響き煙がたつ…

しばらくして煙が徐々に晴れていくとそこにはクレーターの中で碎けた電王ベルトをして血を流す商と勝ち誇ったディロストの青年の姿があった…。

「フン…」

ディロストの青年はつまらなさそうに鼻を鳴らすと後ろに出現した黒いオーロラの中へ去っていく…

変身解除した唯はただそれを見送ることしかできなかった…。

その姿が見えなくなると…

「くそ！くそオオオオオオ！」

悔しさのあまり唯は地面に拳を叩きつけた…。

そして、ディロストの青年が出た先は…

カフェ『スプリング』…

第五話、応戦（後書き）

はい、今回はディロストの無双回でした…

それと…

コラボして下さった作者様、何かごめんなさい…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2328ba/>

仮面ライダーディケイド～紅蓮の破壊者～【オールライダー・バトルカーニバル】

2012年1月15日01時46分発行